様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１５日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７７２００５９
研究課題名（和文）　日本のシェイクスピア受容における影響のメカニズム―「影響の不安」を読み解く
研究課題名（英文）　THE MECHANICS OF INFLUENCE IN THE JAPANESE RECEPTION OF SHAKESPEARE; DECIPHERING "THE ANXIETY OF INFLUENCE"

研究代表者
芦津　かおり（ASHIZU　KAORI）
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：30340425

研究成果の概要：明治期以降の日本が西洋文学からうけた「影響」のあり方や特徴を明らかにする試みの一環として、「西洋文学」の象徴ともいえる大作家シェイクスピアの戯曲に焦点を合わせた。ハロルド・ブルームの「影響の不安」を鍵概念としながら、シェイクスピア作品が日本文学や演劇のあり方にどのような力や影響を及ぼしているかを具体的に考察するとともに、大きく歴史的に概観することで、複雑で多元的な「影響のメカニズム」のいくつかの側面を明らかにすることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	1,200,000	0	1,200,000
2006 年度	222,902	0	222,902
2007 年度	677,098	0	677098
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,000,000	270,000	3,270,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英文学、シェイクスピア、日本文学、日本演劇、比較文学、比較演劇

研究開始当初の背景
(1)日本のシェイクスピア受容研究では、表現やプロットの変更点など、原作との表面的な影響関係を論じる個別研究は多い。しかし、それらをこえた深いレベルでの「影響」を多角的・総合的に論じる研究があまり進んでいるとはいえない。

(2)日本のシェイクスピア受容史研究においては、事実や上演年次を記した編年的な記述は多くみられるが、文化史的な観点や受容をめぐる理論を組み込んだ総括的な研究・分析はあまり多いとはいえない現状にある。

２．研究の目的
(1)西洋と日本の関係の変遷、戦争などの社会的・歴史的要因、さらには個別の作家・演出家らの生い立ち、理念、作風といった個人的

要素などについて、さらに深いレベルでの考察をふまえたうえで、日本文学や演劇に対するシェイクスピアの影響を明らかにする。そうした研究の集積によって、複雑で多元的な影響のメカニズム—すなわち、シェイクスピア文学が日本の文学・演劇のさまざまなテキストにどのように入り込み、どのような形でテキスト生成に力を及ぼしているか—を具体的に解明することを目指す。

(2)さらに、上記のような個別研究を集積することによって、文化史的な視点から大きく「影響のメカニズム」を概観し、明治以降の日本文化・文学とシェイクスピアの関係の特徴と変遷を新しい視点から捉え直す。

３．研究の方法

(1)詩の影響関係について論じたハロルド・ブルームの「影響の不安」を鍵概念とするが、それと同時に近年研究がさかんな翻案や翻訳をめぐる最新の批評理論も採り入れて、「書換え」という創作行為を研究するうえの基盤とする。

(2)シェイクスピアという西洋文学を代表する「大作家」をいかにして日本の作家たちが書換えたかを具体的に分析し、また、そこにおけるシェイクスピアの「影響」の現れ方を分析する。主たる対象は日本人作家であるが、他のアジア諸国や西洋諸国における翻案作品との比較も交えるように心がける。

(3)日本の代表的な翻案例、上演例を対象とし、作家や演出家の考え方、作風のみならず、受容の場のそれぞれの事情や時代・文化背景をふまえながら、シェイクスピア原作がどのような形でテキスト（文章および舞台の）生成に影響を及ぼしているかを詳しく具体的に検証する。

(4)個別例の分析とは別に、明治以降の日本シェイクスピア受容史を見渡す大きな視点から、「影響」の大きな現れ方、時代ごとの特徴や変化などを概観するような研究をすすめる。

４．研究成果

(1) 日本を代表する演出家である蜷川幸雄の数あるシェイクスピア公演のなかでも、とりわけ二重の文化的越境を伴う英国公演『NINAGAWA マクベス』(1980)と『リア王』(1999)を取り上げた。そして、これらの演出的特色やイギリス・日本における評価を詳細に分析することにより、文化的境界線を越えた受容においては、とりわけ多様な政治的・文化的要因が「影響」を生成する点を具体的に示した。具体的には、蜷川の演出においては、彼の日本人大衆と国際マーケット双方へのまなざし、近代日本のあり方や日本演劇界のあり方、それに対する彼の批判意識や屈折した気持ちなどが大きく作用している。他方、英国劇評家のサイドにおいては、日本的・東洋的なものへの異国趣味、シェイクスピアに対する本家意識、自国演劇体制内でのテリトリー意識、上演言語の違いなどといった政治的・文化的な要因が彼らの受容を大きく左右しているのである。

(2)大岡昇平『ハムレット日記』(1955; 1980)は、シェイクスピア悲劇『ハムレット』を政治的観点から読み替えた翻案小説である。それは、大岡が西洋やシェイクスピアに対して抱く複雑な感情（崇拝、対抗心、嫉妬）や、西洋『ハムレット』批評に対する批判精神の生み出した産物であることを明らかにした。さらには大岡の代表作である『野火』と『ハムレット日記』との類似を指摘することにより、人間と社会・政治の関係をめぐる、大岡の生涯を通じてのテーマが本作においても追求されている点も論じた。本研究を英国の学会で発表した際には、とりわけ強い関心が寄せられ、ディスカッションにおいて諸外国の類似例などが多数挙げられた。

(3)中国人監督フォン・シャオガンによる『ハムレット』翻案映画『女帝・エンペラー』に関する考察においては、日本人の黒澤明監督による『ハムレット』翻案映画（『悪い奴ほどよく眠る』との比較を通して、文化政治的な受容の側面を明らかにした。両者はいずれも、著しい経済成長をいずれも、それぞれに著しい経済成長を遂げる最中のアジアで、権威ある監督により生み出された『ハムレット』翻案映画という点では共通する。しかし黒澤は赤字を覚悟のうえ、世界市場の求める「日本」ではなく、切実な問題として彼を悩ます現実の日本を描くことを選んだのに対して、フォン監督は、まさに世界の求める「中国」、イメージとしての「中国」をあえて撮

ることを選び、興行的にもかなりの成功を収めたという点で対照的である。

(4)異文化受容の諸条件を分析する目的で、レッシングの戯曲『エミーリア・ガロッティ』の英国初演についての考察も行った。この研究においては、直接に日本のシェイクスピア受容を論ずることはなかったが、文化的越境をともなう作品受容における普遍的現象を確認することができた。つまり、異文化における作品の受容に際しては、原作の根ざす具体的文脈や、その作品が内包する価値体系が遠のいたり、失われたりしがちであり、その代わりに受容者側の生きる時代の文脈や彼らの拠ってたつ価値基準が、それらに取って代わる傾向が強いということである。

(5)約 150 年におよぶ明治以降の日本の『ハムレット』受容史を、全体に 5 段階にわけて特徴づける研究をまとめた。第 1 期「『ハムレット』登場; 1841-1900」では、明治の近代化政策の一環として移入された同悲劇が、「西洋思想」や「近代人の内面」を体現するものとして、先進的な明治知識人や文学者の心をとらえた様子を紹介する。この段階での「影響」は、主として驚異や崇拝として現れる。第 2 期「演劇界の『ハムレット』; 1886-1918」では、大衆的感性に支えられる演劇が、文学よりも遅れて同悲劇の移入を試みる様子を、第 3 期「書斎の『ハムレット』; 1905-1945」では、近代リアリズム劇流行と戦争によりシェイクスピア劇が舞台から姿を消し、主に研究や翻訳の対象となった様子を、第 4 期「みんなの『ハムレット』; 1946-1980 代半ば」では、戦後、『ハムレット』が大衆化された形で国民的人気を博してゆく様子を、第 5 期「国際的『ハムレット』; 1980 年代半ば～」では、グローバリゼーションの時代を迎え、受容がますます国際化・多様化していく様子を中心に考察した。後半になればなるほど、シェイクスピアはたんなる尊敬や驚異の対象としてではなく、東西文化のカルチュラル・ポリティックスの道具として、あるいは文学的・知的遊戯のための共通の文化的土壌として日本文学・演劇のなかに現れるようになる。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
①芦津かおり、「越境する演劇：グローバルな作家のローカルな受容—蜷川幸雄の英国公演をめぐって」、『西洋文学研究』（大谷大学西洋文学研究会、2008 年 6 月） pp.3-18. 査読有
②芦津かおり、「『女帝・エンペラー』—女たちのハムレット」、Shakespeare News, Vol.28, No.1（日本シェイクスピア協会、2008）, pp.37-40. 査読有
③芦津かおり「日本の『ハムレット』受容—その多様な変貌」『文彩』 第 3 号（熊本県立大学、2007 年 3 月）、pp.6-15. 査読有
④芦津かおり「英国における『エミーリア・ガロッティ』の受容について」、『真宗総合研究所研究紀要』23 （大谷大学真宗総合研究所発行、2006 年 3 月）、pp.57-75.査読無

〔学会発表〕（計 4 件）
①Kaori Ashizu, "Politicizing *Hamlet* — Ooka Shohei's *Hamlet's Diary*,"English Literature Today, August 29, 2008, Christ Church, Oxford

②芦津かおり、「『ハムレット』の政治化——大岡昇平『ハムレット日記』について」、西洋文学研究会、2008 年 7 月 26 日、大谷大学

③芦津かおり、「越境する演劇—シェイクスピア演劇とコスモポリタニズム」、日本英文学会関西支部シンポジウム、2007 年 12 月 22 日、大阪大学

④芦津かおり、基調講演「日本の『ハムレット』受容—その多様な変貌」、熊本県立大文学部フォーラム「シェイクスピア万華鏡」、2006 年 12 月 16 日、 熊本県立大学

〔図書〕（計 1 件）
Kaori Ashizu（共著）, *English Literature Today* (Tbilisi University Press, 2009). 掲載決定、校正中

6．研究組織
(1)研究代表者
芦津　かおり
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：３０３４０４２５
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし